



桂川っ子

VOL.32



子どもたちが笑顔で過ごせる町であってほしい

桂川町教育委員会

教育長 穂坂 和義

秋の夕日のつるべ落とし。午後5時を過ぎると、もう辺りは薄暗くなり始めています。そんな10月末のある日のことです。

庁舎のベランダから外を眺めていると、ちょうど下校時刻だったようで、女子中学生が楽しそうにおしゃべりしながら通り過ぎていきました。学校でいいことでもあったのでしょうか、盛んに歓声や奇声が上がっています。

その後すぐ、再び数人の女子グループが、今度は声を合わせて何やら合唱しながら帰っていきます。近づいてきた文化発表会の合唱曲でしょうか、それとも今日の音楽の授業で習った曲だったのでしょうか。誰かが間違えたのか、どっと歓声が上がります。1、2、3の掛け声でもう一

度最初からやり直しのようです。

そういえば、住民センター前の広場では、放課後になると数人の子どもたちが楽しそうに遊んでいるのをよく目にします。サッカーをしたり、草野球であったり、それも時には男女混合の時もありますし、上級生と下級生といった異年齢集団の時もあります。

子どもらしからぬ事件が日常化した今日、このようなほほえましい光景に出会うと何やらほっとして心が和んできます。それだけ世の中がせちがらくなつて、子どもたちから子どもらしさを奪ってきただいことでしょうか。

子どもたちに見られる様々な現象は、すべて大人社会を反映しているのです。世の中全体を変えることは無理な話かもしれませんが、せめて桂川町内では子どもたちが笑顔で安心して過ごせるよう、桂川町の大人の責任で見守っていきたいものです。

【考えるって、素敵だね】

桂川小学校校長 本田 義隆

「はしご車は、どんなしごとをしていますか？」
 「火をけします。」
 「高いところの火をけします。」
 「人をたすけます。」
 「高いところにいる人をたすけます。」
 「どちらが大切だと思いますか？」
 「火をけすのは、消防車です。はしご車は、はしごがあるので高いところの人をたすけます。」
 なるほど……

「そのために、はしご車は、どんなつくりになっていますか。」
 「あしがついています。」
 「はしごがついています。」
 「タイヤがついています。」
 「タイヤは、どの自動車にもあるので、はしご車づくりには、はいりません。」
 なるほど……

「レバーがついています。」
 「かごがついています。」
 「この中で一番大切なものはどれでしょうね。」
 「かごです。けがをした人をのせることができるから。」
 「はしごです。のびたりちんだりして人をたすけることができるから。」
 「レバーです。レバーではしごを動かすから。」
 「あしです。はしご車がおれないようにしているから。」

これ、一年生の国語科の学習です。すごいでしょ。

子どもたちが考えを出し合う。話し合い、皆で考えている。子どもたちがつくる授業。たくさん実践していきます。

